

テーマ “困った子(人物)”から“困っている子(人物)”へ 発達障がい児・者への理解と支援

中村学園大学教育学部児童幼児教育学科 笠原 嘉治 氏

【講話の概要】

○最近のニュース「静かな水族館」

○発達障がいとは

生まれつき脳機能の発達のアンバランスさ、発達の凸凹(でこぼこ)によって、社会生活に困難が発生する障がい。

○ASD(自閉症スペクトラム障がい)

2013 年 5 月に精神医学の診断基準が改定され、従来の「広汎性発達障害」「アスペルガー症候群」などが「ASD」に一本化された。コミュニケーション及び相互関係の障がい、同一性へのこだわりや興味・関心の狭さ、聴覚・視覚・触覚など感覚の過敏性。

○AD/HD(注意欠如・多動性障がい)

不注意、多動性、衝動性といった症状が特徴。本人の努力の有無ではなく、「忘れ物をしやすい」「じっとして待つことができない」という行動特性を生み出す。

○LD(学習障がい)

特定の分野の学習だけが極端に困難な状態。



○「当事者の困り感」を疑似体験

○「発達障がい」の感覚過敏

「明るすぎる」「チラチラする」などの不快な見え方や聞こえすぎてしまう感覚過敏。

○発達障がいの当事者の数

全国の公立小中学校の通常学級に 8.8%、35 人学級なら 3 人の割合(全国公立小中学校調査)。

○生きづらさは、周囲の理解と適切な配慮、環境の調整があれば軽減できる→合理的配慮

○地域でくらす「発達障がい児・者」にどのように関わったらいいのでしょうか？

- ・周りの理解と温かいまなざしの中で、過敏に反応しないですむ環境づくりができたことを伝える。
- ・苦手さや辛さを言葉で伝えることなどを考え、理解してもらえる経験が、生きる力を成長させる。

○特性を生かした事例

過敏→正確・緻密の能力は、「マイクロソフト社」が探し求めている人材。

○環境の調整事例

刺激を減らして買い物を楽にする「クワイエット・アワー」→「収入の 1 割増加」

○「障がいのある人たちにやさしいまちは、どんな人にもやさしいまち」

合理的配慮で提供される様々な支援は、一人の特定の障がい者専用のもではなく、同じような生きづらさを感じている多くの市民、国民にとっても、“あると便利な支援”。